

茶のこころ・禅のこころ

堀井 無縄

1 はじめに

皆さん今日は。堀井無縄でございます。

私からお話をさせていただく前に、感謝とお礼を申し上げたいと存じます。

この度、第2回茶禅一味の会をご案内申し上げたところ、遠くは九州・四国・北海道から、また地元新潟地区の皆様は350名もの沢山の方のご参加を賜り、今日の講演会にはこの大栄寺さんの本堂が埋まる位の皆様にご参加を賜り、厚く御礼申し上げます。

このように盛大な茶禅一味の会が出来ますことは、これも偏^{ひとえ}に如々庵芳賀洞然老師が、この地に茶禅一味の会の種をまかれ、長い間、会を続けてこられたことが、生き活きと生きてきた賜物でございます。先師如々庵老師のご遺徳に改めて感謝申し上げる次第でございます。

また、この素晴らしい自然環境の整った日本一の会場を、快くご提供下さいました北方文化博物館の伊藤文吉館長様、大栄寺様に心から感謝申し上げ、厚く御礼申し上げます。

昨晚の熊倉功夫先生の『利休の茶』に続き、今日は国際人として有名な、また日本を代表する文化人としてユーモアたっぷりのお話をされる芳賀徹先生の『失せざる花 老いと芸術』、大変素晴らしいお話に感動いたしました。

この後でお話するのは、先生のお話の余韻を消してしまうのではと

いう思いがいっぱいでございますが、私からは『茶のこころ・禅のこころ』ということでお話をさせていただきます。

暫くの間、ご辛抱をお願いいたしとうございます。

2 百丈和尚の「一日作さざれば一日食わず」

(1) 『食前の文』

いま、私共の禅道場では食事の時、箸を採る前に、皆んなで『食前の文』を斉唱してから、食事をいただいております。その『食前の文』とは

- 百丈和尚の云く、「一日作さざれば一日食らわず」と。我れ今恥ずること無くして此の箸を採り得るや？
- 臨済和尚の云く、「食を思えば百味具足す」と。我れ今何の徳あってか此の良薬に遇う。省りみざるべけんや。
- 雲門和尚の云く、「識得すれば醍醐の上味、識得せざれば却つて毒薬」と。当に咀嘔翫味すべきの語なり。
- 維摩居士の云く、「法喜禅悦を以て食と為す」と。我れ今万劫の飢えを療ぜんが為に、此の一飽を味わうものなり。
- 金牛和尚の云く、「菩薩子！喫飯来！」と。我れ今仏祖の慈恩を念じつつ応に此の食を受くべし。

と唱えて食事をいただいております。

今日はその「一日作さざれば一日食らわず」の名言を吐かれた百丈和尚の一端についてお話させていただきます。

百丈和尚は今から凡そ1250年程前、中国で活躍された禅の高僧であります。江西の馬祖道一禅師（馬大師）の法を嗣ぎ、南泉和尚、西堂知蔵和尚とあわせて、馬祖下の三大士と称せられた禅僧であります。馬大師や百丈和尚のおられた頃の禅宗は、中国で最も興隆した時代で、どこの禅寺に行っても、沢山の雲水・修行者が集まって、集団で修行していました。百丈和尚は馬大師から嗣法した後、今日の中国江西省にある百丈山に智壽聖禅寺を開き、大いにその禅風を挙揚されたの

であります。

和尚の遺された古則公案には『百丈野狐』や、『百丈再参』などの名高い公案がありますが、最も有名なものは、禅寺の規律や作法を定めた『百丈清規』^{しんぎ}であります。

それまで各禅寺では、修行に関する規律や作法は、バラバラであったのですが、この百丈清規は中国全土に流布^{るふ}し、今日まで活々と伝えられているもので、私共の人間禅においても、この『百丈清規』によるものが多いのであります。

(2) 動中の工夫

百丈和尚は普段何をやられるにも、すべてにおいて綿密にやられた和尚で、禅道場で食べる米や野菜を作る畑仕事にしても、綿密にやられました。禅道場では作務^{さむ}といって、坐禅をする「静中の工夫」に対して「動中の工夫」を修行の車の両輪として重視しているものであります。

百丈和尚は80を過ぎても尚、率先して大衆の先頭に立ち、鋤^{すき}や鎌を持ち、仕事をしておられました。弟子達は、和尚も高齢になっておられるだけに、いまのままで作務を続けておられれば、ご法体にさわると案じ、またいつも和尚が先頭に立って作務をされるので、弟子達は一日も休むことが出来ないということもあって、皆で相談の結果、作務を休んでいただくには、和尚の使っている道具を片付けてしまえばなさるまいということになり、後日和尚の使っている道具を全部かくしてしまったのです。それとも知らず、和尚いつもの通り、作務の時間になりましたので、道具を使おうとしましたが、その道具がありません。その辺をウロウロ、しばらく探しましたがどうしても見つからないので、和尚あきらめて隠寮に戻ってしまわれたのです。

昼時になって、侍者が昼食を持参しましたが、和尚は隠寮で只ゴツゴツと坐禅されていて、昼食を召し上がる様子がありません。夕方に

なり夕食を持参しましたが、これも召し上がりません。

和尚はおなかの調子でも悪いのかしらと思いましたが、そうでもないようです。院主、役位の者達は心配になってきて、80を過ぎたご高齢の和尚が少しも食事を摂られないのでは、ご法体にさわると、おそろおそろ和尚へお伺いをしたのであります。その時に和尚の云われた一語がこの「一日作さざれば一日食らわず」の語であったのです。まさに恐れ入った一語で、院主達は改めて深々と、お詫びを申し上げ許しを願ったのであります。

この語は、今日一日、世の為・人の為・自分の為にどれだけの自利利他行をやれて、恥ずることなくこの箸を採り得るやと反省し、食事をいただくという、自分に厳しく、人に思いやりの一語であります。

百丈和尚は90歳のお齢になられても、なお野良仕事を厭わず、この「一日作さざれば一日食らわず」を率先して実践されたのであります。

(3) コミュニズムと違うところ

この度、半世紀もの間、政権の座にありました自由民主党は国民生活を無視した官僚主導の政治で、国民の信を失い政権交替になりましたが、近代資本主義、民主社会においては真面目に働く人達が食べられる世の中、国民が安心して暮らせる社会でありたいものです。しかし、コミュニズムの思想に片寄る人達は、資本家や資産家で有閑徒食している人に対し「働かざる者は食うべからず」という主張もあるようです。

確かに親の偉功にあぐらをかいて、少しも働かないで贅沢している人や、何も為すこともなく遊んで徒食している人は、非難されるべきでありましょう。また、不当な権力を行使して金儲けしたり、悪質商法や欠陥商品、食品偽装の悪徳商売で金儲けしたり、仲間を蹴落としたりも競争に勝ち、自分だけが幸せになりたいという欲望だけが先行する人達は非難されるべきでありましょう。

しかし、この「働かざる者は食うべからず」の主張には激しい憎しみ、妬^{ねた}み、恨み、非難の念が込められています。

これに対し「一日作さざれば一日食らわず」は、自分自らが反省し、働かないではおられぬという自戒の念、自主的・自発的、謙虚な思いやりの心からであります。

(4)「作す」は正念に住し、自利利他円満の行

しかも和尚のこの「作す」は正念に住し、自利利他円満の仏作、仏行の作すで、雑念を少しも混じえない、「一行三昧」の作すであります。

そして和尚のこの「作す」はもっと高い所にあって、今日一日、正念でどれだけやれたかを正直に反省しておられる「作す」で、あります。

この「作す」にはこれだけの深い意があり、これが百丈和尚の五臟六腑なのであります。

3 正念で点てる茶こそ真の茶道

(1)茶禅一味に結びつけるものは三昧

禅で最も尊ぶものは、何事も正念でやる「一行三昧」であり、茶道で最も尊ぶものは「点茶三昧」、茶道と禅道を結びつけ一味ならしめるものは「三昧」であります。

「三昧」の意には、正念の一貫相続、正受にして不受、自他不二・物我一如、この三側面の意がありまして、この三側面を一にした心のはたらきを三昧といいます。

「正念の一貫相続」とは

「万里一条の鉄」という語がありますが、一条の鉄線が一点の切れ目もなく千里万里と、どこまでも続いて少しの異物を混じえないという意であります。お茶を点てる時は、始めから終わりまで点茶の一念だけが、生き生きと一貫相続して、「点茶の一念」が続くことが正念

であります。

正念とは、「一心不乱」、丁度コマが振々と回転して、生き生きしている状態であります。何も考えないことや、一種の恍惚境に入る「無念無想」、我を忘れて何かに心を奪われて夢中になる「無我夢中」という意ではありません。

そして「正念相続」とは、当面の事^じに当たる一念だけが生き生きとはたらき、切れ目なく一貫相続することです。

「正受にして不受」とは

外からの刺激をその通り感受して、素直に対応し、しかもその刺激が去れば、その痕跡も止めないという、明鏡のような働きを「正受にして不受」と言います。

鏡の前に美人が来れば、ありのままに美人が写り、醜男が来れば醜男が写る。「正受」してしかもその美人が去れば、一点の痕跡も残らないのが「不受」であります。

「雁長空を過ぎて影寒水に沈む。雁に遺縦^{いししょう}の意なく、水に沈影^{しん}の心無し」という語がありますが、雁は大空を無心に飛び、水は無心に写すように、共に無心・無作で、少しの跡も残さない、二念を継がないことです。

「自他不二・物我一如」とは

「天地と我と同根、万物と我と一体」「山川草木皆我面」という禅語があります。この天地間にあるものは、その形・すがた、はたらきはすべて違いますが、万物も人間も皆同じ宇宙の大生命、根本は同じで、万物と人間は一体であるという、仏教の世界観であります。

お茶を点てる時に、茶筌^{ちやせん}と自己とが不二となり、自己が茶筌か、茶筌が自己かと一如になって、よい茶が点ち、肚知り合った同志が「主客一如」となり、亭主と客が、主となり客となって円転滑脱、無擬自在に運んでゆく茶が、本当に楽しい茶になるのではないのでしょうか---

先日、歌舞伎俳優の女役^{メケ}の女形、板東玉三郎さんのお話を聞いてい

ましたら、「自分が舞をしているという意識が少しでも入った時は、いい舞にならない。また上手に踊ろうなどと少しでも思ったらいい踊りにならない。藤娘が自分なのか、自分が藤娘なのか、わからなくなり、無心に舞っている時が、最上の舞だ」と云っていました。要するにそのものに成り切ることであります。

剣を持てば、剣と我と不二一如となるのが真の剣道でしょうし、筆を持てば、筆と我と不二一如なるのが、真の書道ではないでしょうか。

禅定三昧、点茶三昧

点茶三昧の力を我がものとして修練する一番の近道は、坐禅の行で、禅定三昧・数息三昧を修練するのが最も望ましいことでもあります。数息三昧は、数息の念だけが生き生きとはたらき、切れ目なく一貫相続することです。しかし、息を数える自分と数えられる息とが対立し、息を数えることが意識されている間は、ほんとうの数息三昧とは云えないもので、工夫する自己と、工夫される息とが一如になることが三昧であります。これは難中の難事で、難しいことではありますが、やろうという勇猛心があれば出来ます。この三昧の境地を我がものとして、体得するには、禅の正脈の師家について修練に修練を重ねることです。

4 白隠禅師と山梨平四郎

(1) 人生に無常観

江戸中期、臨済宗の中興の祖として仰がれ、禅の民衆化に尽くした白隠和尚の門下に山梨了徹居士という有名な居士がおりました。山梨平四郎^{いはら}といって、駿河庵原の大地主で、商売を手広くやっていた豪商でありました。この庵原から余り遠くない原の松蔭寺に、民衆に禅の指導、布教をされていた白隠禅師がおられたのです。沢山の商人や百姓、老若男女が我れも我れもと、禅師の教えを受け参禅し^{せきしゆおんじょう}『隻手音声』の公案などを授かり、ヤレ悟りの何のと騒いでいるのを耳にしていた

平四郎、これに反感をおぼえていたのです。

平四郎は、そんなことは世事にかかわりのない暇人のやることだ、商人は商人らしく商売に励めばいいし、百姓は百姓らしく、一生懸命農事に励めばいいと、禅なんかには参ずることを嫌っていました。当時は宗教に入り込めば、家業に熱意がなくなり、家業を潰してしまうと。宗教なんてものは齢を取ってからやるものだという風潮がありました。このことは現代においても同じような風潮が残っておりまして、そのせいで宗教に関心のない人が多いのではないのでしょうか。平四郎は常々 白隠の隻手の声を聞くよりも、両手を打って商いをせよ と豪語していました。ある時、近くの「黄龍おうりょうの漱しょう」という景勝地へ、家人や番頭、手代、それに芸者やたいこもちなどを連れて、遊山に行ったのであります。今で云うレクリエーション・観楓会で、飲めや歌えの大宴会をやっていたのであります。その内、馬鹿騒ぎも少し飽きてしまった平四郎、独り溪流のほとりを散歩していると、小さな滝があって、その滝壺を見ると、沢山の水の泡がポカリ、ポカリと生じているのです。

1尺位流れてパーと消えるもの、1間位流れてから消えるもの、2間位流れて消えるもの、それを何気なく見ていた平四郎、フト鴨長明の【ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮かぶうたかたはかつ消え、かつ結びて久しくとどまりたるためしなし。世の中にある人と栖すみかと、またかくのごとし】の『方丈記』の一節を思い出し、人間の寿命もこんなものかしら！と。いまこうして元気で暮らしているけど、この水泡の様に、いつ何時、パーと消えてしまうか判らないもんだと、フト人生の無常観に誘われたのであります。

そう思うと折角の酒もさめてしまい、ドンチャン騒ぎをしていたのも阿呆らしくなって、矢も盾もなく帰ることになりました。

帰り道の途中、童が声高らかに読む『沢水たく法語』の【もし人、仏道を成ぜんと欲せば、先ずすべから須く見性すべし。勇猛の衆生の為には成仏

一念にあり。懈怠けたいの衆生の為には涅槃さんぎ三祇に亘る】、この意は、勇猛の人は一念で成仏出来るが、怠け者は永遠に安心の境地は得られないものだといっているのでありますが、これを何気なく聞いていた平四郎、この語が沢水和尚の云う通りであれば「俺も一つその見性とかをやってみよう」と勇猛心を奮い起こし、家に帰るなり、直ぐ一室に閉じこもって、坐禅にはいったのであります。

(2) 見性して了徹居士

平四郎は元来、肝っ玉の坐っている人物でした。やるとなったら徹底真剣そのもので坐ったのであります。初めの間は胸中に煩惱・妄想が往来し、仲々三昧になれませんでした。そのまま坐り、禅定三昧、打成一片となり、三日三晩坐り通したそうであります。三日目の朝、夜もしらじらと明け、軒下に雀がチュンチュンと鳴くのを聞いた平四郎、ハアッーと、大死一番から絶後に再蘇がいけ、心の源底を尽くして自己本然の性に徹したのであります。

雨戸を開けて見ると、見る物、聞く物がすべて昨日とガラリと変わってしまったのです。「これが禅の悟りというものか？」と平四郎。ひとつ白隠和尚にぶつかって、試してもらおうと急いで駕籠を頼み、原宿の松蔭寺へ、白隠禅師の室を叩いたのであります。白隠老漢が数段の因縁（公案）を挙して試したところ、何れも真正の見解けんげを呈したということで、平四郎、痛快に悟ったのであります。老漢も「汝大いに徹せり」と許され、「了徹」の道号を授けられたのであります。

(3) 商意は即ち禅意なり

これが因縁となって了徹居士、大いに参禅弁道に励み、白隠門下に了徹ありといわれる大居士になり、後に白隠の印可をうけたのです。修行が進むと共に、商売・事業も益々繁盛し、世の為人の為に貢献したのであります。

そして嘗て生意気にも 白隠の隻手の声を聞くよりも、両手を打つて商いをせよ と詠っていた歌を悔い改め、白隠の隻手の声を聞いてから、両手を打つて商いをせよ と訂正し、「滋味深い大法の法乳」を人にも食べさせたいという思いやりの心で、大いに布教にも骨折り、売って喜び、買って喜ぶ商人道「商意は即ち禅意なり」に徹し、世の為、人の為に尽くしたのであります。

わたくし、この7月に、機会を得まして、古人が 駿河には過ぎたるものが二つあり、富士のお山と原の白隠 と歌われた原宿の松蔭寺や、白隠和尚の開山で、明治の初め山岡鉄舟が江戸から馬で箱根越えて、星定和尚に参じたという三島の龍澤寺を訪ねることが出来、沢山の感動と禅機をいただいて来ました。

5 茶意は即ち禅意なり

(1) 禅に参じた茶匠達

茶事三昧と禅定三昧とは共通する茶禅一味の思想によるものであります。この茶事三昧の境地を実境涯として得るには正脈の師家に参じて修行するのが一番の近道であり、脚実地に実習して三昧力を養い、茶事に活用する以外ないものであります。

茶匠村田珠光じゆこうは一休和尚に参禅し、武野紹鷗じゅうおう 鷗は大林宗套だいいりんそうとう、津田家久、千利休せんりきゅうは、笑嶺宗訴しょうれいそうきんに参じ、古田織部こたており・小堀遠州こぼりえんしゅうは春屋宗園しゅんおくそうえんに参じ、千宗且せんそうのみは玉室宗珀ぎよくしつそうはく、江月宗玩かうげつそうがん、沢庵宗彭そくしやうと結び、茶禅一味の茶道を確立したのであります。そして「一碗の茶から平和を」ターゲットとし、国際的に日本の茶道の普及に活躍しておられる裏千家、前の家元千玄室宗匠は後藤瑞巖老師、梶浦逸外老師に参じておられるのであります。

(2) わび茶、清貧の茶

茶道がその実践を通じて実現しようとする美は「わび」の美であり、

このわびの美は平安時代から室町時代にかけて、和歌、連歌、能楽などの発達によって深められ、禅の思想によって更に深められたものがあります。禅では人間修行の究極を「すりきり貧乏」といって「去年の貧は錐あって地無く、今年の貧は錐もなく地も無し」という、すっからかんの境涯を非常に高く評価していますが、このわびも単なる貧でなく「身貧にして、道貧ならず」の清貧であります。

6 おわりに

『禅茶録』には【禅茶の器物は美器に非ず、珍器に非ず。宝器に非ず、旧器に非ず、円虚清浄の一心をもって器とするなり。この一心清浄を器として扱うが禅機の茶なり】とあります。

近年、茶人の心構え、茶道のあり方がこの真義から少し離れて派手になり、内より外、心より形を表現することに傾いて、道具や名誉を競い合う茶事になっているように思われます。

茶のこころは「主客一如」、思いやりの心で絆が結ばれるもの、茶のこころは禅のこころであります。日本文化を守る為にもこの茶禅一味の会が、茶道を志す人々の架け橋となり、茶事を修すると共に、禅道を修する人々が増えて、いよいよ発展することを心より念じて、終わらせていただきます。

長時間のご清聴有難うございました。

合掌

(平成21年9月6日、第2回茶禅一味の会の講演より)

著者プロフィール



堀井無縄（本名 / 淳彌）

昭和3年、函館市生まれ。大槻食材株式会社社長、顧問を歴任。現在、創味フーズ取締役会長。昭和26年、人間禅立田英山老師に入門。現在、人間禅師家。庵号 / 了空庵。